

わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて
 25 関東の戦国時代5
 案内役 田村哲三



とて両者は和睦しますが、梁田氏の勝利ともとれます。これを第1次関宿合戦と呼びます。長尾景虎は、越後に逃れた関東管領上杉氏を継ぎ、上杉謙信となっていました。

長尾景虎が越後に引き上げると北

条氏は再び関東に進出。永禄7年(1564)、反北条の岩槻城太田氏・里見氏の連合軍と国府台で戦い勝利します。これを第2次国府台合戦と呼びます。勢いついた北条氏は翌永禄8年、反北条の主力関宿城梁田氏を攻めます。

関宿城は、ここを取れば関東を制したことと同じと言われる重要な城。この関宿城で梁田軍は北条軍を撃退します。その時、梁田氏が鮎川氏にあてた文書には「昨日九日岩付口から敵軍が攻めてきたとき、これに呼応して観井と雪江の間で敵を打ち取り、その証拠を持ってきたが、その働きは比類ないもので、非常に喜ばしく思っている。この功により国司名重後守を与える。今後もよく忠孝に励むように卯月十五日持助花押 鮎川重後守殿」と書かれています。

親井は現在の野田市親野井で富江は吉川市富新田です。当時はこの間に太日川(現・江戸川)が流れていました。鮎川水軍にとって、面目躍如たるものでした。その後、越後の上杉謙信が関東進攻の気配を見せたこ



現在の関宿城(野田市)。戦国時代は関東の中心的位置に立っていた

謙信はこの年、再び関東に進攻。古河公方足利義氏は、謙信についた

かつての重臣梁田氏とも敵対して小金城に逃げていきます。下総に攻め込んだ謙信でしたが、小金城や日井城を落とすことができず、翌年4月には越後に帰ります。

永禄11年(1568)北条氏は再び関宿を攻めますが、武田信玄との戦いや謙信の仲裁もあり休戦しました。北条氏と梁田氏は戦ったり休戦したりを繰り返しましたが、天正元年(1573)、北条氏は本格的な攻勢をかけます。包囲された

関宿城は城内から離脱者が出るなどして翌年に開城。これを第3次関宿合戦と呼びます。この間、流山市域の前ヶ崎、名都借、花輪、深井の各城は関宿城と敵対しました。豊臣秀吉の小田原征伐で小金城は浅野長政軍に下り、天正18年(1590)5月に開城しました。このとき市域の各城も運命を共にしたと思われる。

わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて
 26 江戸時代1
 佐和山落城記
 案内役 田村哲三



之助の自刃。隼人と宇吉郎が東深井に移り住んだ様子。隼人は大阪の陣で大阪方に加わり、慶長20年(1915)、5月に討死にしたことなどが書かれています。元和

江戸時代は何時から始まったので

しょうか。徳川家康が征夷大将軍になった慶長8年(1603)とする説と、関ヶ原の戦いに勝利した慶長3年(1600)の説があります。江戸時代の終わりは徳川慶喜が大政奉還した慶応3年(1867)ですから、265年間ほどが江戸時代であったわけです。

関ヶ原の戦いに関して、市内に残されている史料はほとんどなく、昭和10年、東深井にある山田家の蔵(ギャラリー平左衛門・運河駅近く)から発見された古文書が、唯一ともいえるものではないかと思われます。古文書は東京帝国大学史料編纂所の渡辺世祐博士によって研究され「佐和山落城記」と命名されました。古文書は原本をそのまま写本され、東大史料編纂所に蔵書されています。

古文書によると山田家の祖は石田三成の重臣山田上野助で、関ヶ原の戦いの3日後、佐和山落城の際に自刃しました。子の隼人と孫の宇吉郎

は城を脱出。10年後に東深井に移り住んだとあり、古文書を書いたのは医者となり喜庵と名乗った孫の宇吉郎でした。内容を要約すると、徳川家康が豊臣秀吉の意にそむき上杉攻めの軍を挙げ、そこから関ヶ原の戦いにいたったこと。三成は敗れて伊吹山に逃げたが古橋村で捕縛されたこと。佐和山城での合戦の様子や上野

2年(1616)5月の書ですから家康が死んだ翌月のもので、隼人の死後1年のものです。家康の死や隼人の1周忌を機に山田家の出自を記録したのでしょう。

では石田三成の重臣だった、山田上野助はどんな人物であったのでしょうか。上野之助の出身地は琵琶湖北部の山田村。役職は不明ですが、長浜市に残されている石田三成文書によると勘定方のトップと推定されます。文書は年貢に関するものですが、三成の第一の家老・島左近の次にその名があることでもわかります。次に山田上野助の子・隼人はなぜ徳川の支配地の東深井に住んだかも謎の一つです。大谷吉継の子孫が東松山市に移り住んだことと似ているので関連があるのかもしれない。また、上野之助の遺言で、佐和山落城の際の死者を弔うために建立された山田家の氏寺・慈眼院に關係しているとも考えられます。



古文書「佐和山落城記と山田家の蔵(平左衛門)



わがまち・ふるさと再発見！

流山のむかしを訪ねて
江戸時代2
小金牧1
案内役 田村哲三



徳川家康は関東に移封になると、江戸の町づくりや江戸周辺の整備に取り掛かります。その中で流山市域にかかわる事業としては、利根川の東遷事業と小金牧の設置事業がありました。

◆房総三牧と小金牧
縄文時代、地域の低地部は水深の浅い海で魚介類が採れ、人々は海辺の近くの台地に住み、生活していました。弥生時代になると水深の浅い海は湿地に変わり、稲作ができたので人々は相変わらず低地部に近い台地に住んでいました。台地の奥は人の住まない原野が広がっていたため、徳川幕府はそのような原野に馬を放牧しました。

徳川幕府は下総国に小金牧と佐倉牧、安房国に嶺岡牧を設置して軍馬の育成を行いました。
小金牧は野田市から流山市、柏市、松戸市、鎌ヶ谷市、白井市、印西市、船橋市、習志野市、千葉市、八千代市にいたる広大なものでした。小金牧はさらに庄内牧、一本柵牧、高田台牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧に分かれ、流山市域は上野牧に属し、柏市の十余二は高田台牧でした(庄内牧と二本柵牧は早期に消滅)。牧には柵はなく放牧馬を野馬と呼びました。

◆牧の管理

牧の管理は野馬奉行綿貫家のもと牧士(もくし)と呼ばれる地元の実力者が実質的に担当しました。牧士は名字帯刀、乗馬、鉄砲所持が許された士分格でした。牧士は牧内を見回り、非常時の餌や水の供給も行いました。冬場は餌が不足しますし、夏場は水飲み場の水が枯れることがあるので、ところどころに餌料桶や水桶を配置。病気や怪我の手当や保護、斃馬(死んだ馬)の検視、狼や野犬、イノシシなどの駆除もあります。鉄砲の所持は狼や野犬から馬を守るために使われました。これらの役目は牧士が村人を指揮して行いました。牧士の手当は、初めは馬3匹でしたが、享保年間に5両に、牧士をまとめる目付牧士は8両に変更されました。ただ、村人への手当も含まれているので、全てが収入になったわけではありません。

村には農耕馬もいましたから、牧や村には繋馬捨て場がありました。ただ、市内には、なにびとがどのよう処理したかを示す資料が残されていません。



出典:「ふるさと流山のあゆみ」より

わがまち・ふるさと再発見！

流山のむかしを訪ねて
江戸時代3
小金牧2
案内役 田村哲三



徳川政権が安定してくると軍馬の必要性も薄れてきました。戦がないので馬の消費も少なくなり、牧で捕獲された馬の一部は民間に払い下げられ、荷役馬や農耕馬として使われました。江戸中期になると幕府も財政難が出てきたことから、牧内の新田開発に取り組みました。開幕当初の新田開発は、低地部に広がる湿地帯の水田化でしたが、今度は陸地(牧内)まで新田開発を進めたのです。

牧内の新田開発は原野の開発のため、水田ではなく畑になります。原野を開発することも大変なのに、開墾しても米は取れず、火山灰の積もったローム層により土壌改良にも時間がかかるなど、入植者は大変な苦勞をしました。

平方原新田(現・美原)の例でみると、現存する墓石などから、開発が始まったのは1600年代の終わり頃と推定されます。しかし、検地され、村が成立したのは1730年です。ですから、作物が取れ年貢を納めるようになるまで、実に30年以上かかったことになり。原野の新田開発がいかにか大変であったかがわかります。

自然に住み分けされていきましたが、新田開発によってそのバランスが崩れました。新田はそれまで野馬が住んでいた地ですから、野馬は新田であろうがなからうが堂々と入り込んできます。しかも畑に作物があればそれを食べるのも自然の行爲ですが、村人にとっては畑が野馬に荒らされることは死活問題です。まして何十年もかけて開発した土地です。村人は牧との境界に土手を築くことを幕府に願い出しましたが、幕府はなかなか許可しませんでした。村人は仕方なく境界に樹木を植え、野馬追いの番人を立てるなど対策を取りました。このような村を野馬入新田と呼びましたが、幕府は村人より野馬を優先。村人は根気よく土手の築堤を申請してようやく野馬土手を築くことができました。

平方原新田の例でみると、入植してから50年近く野馬土手はなかったようです。



「ふるさと流山のあゆみ」から弊社編集と野馬の住む原野は地続きながら、

わがまち・ふるさと再発見!
流山のむかしを訪ねて

29 江戸時代4
小金牧3



案内役 田村哲三

◆野馬土手
野馬土手は野馬除土手ともいい、馬が畑や村内に入るのを防ぐために、牧と村の境界に築かれました。

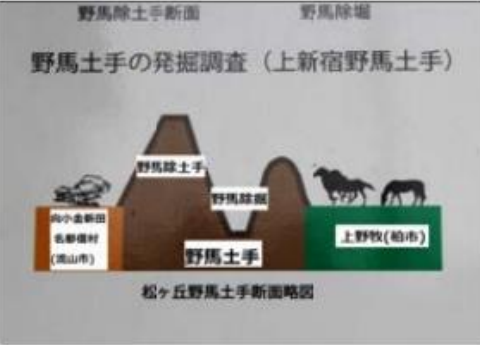
野馬土手は幕府に村人が何度もお願いで許可が出され、築堤したものでした。そのため、土手を築く費用は村人持ちとなり、風雨により破損した場合、その修理も含めかなりの負担を強いられました。しかし野馬に作物を食い荒らされることと比較すれば、幕府から許可が下りたことに、村人は歓喜したことでしょう。

築堤は牧側を掘り下げて掘削土を境界に積み上げたので、牧内には堀ができました。これを野馬堀と呼び、土手とともに野馬の脱出を防いでいました。また、土手は二重構造のものもありました。

野馬土手には野馬が村の侵入を防ぐほか、傾斜地から水田に落ちるのを防ぐものや牧と牧を仕切る仕切土手(中土手)、捕込という野馬を捕獲する場所に馬を追い込むための勢子土手などがありました。勢子とは野馬捕りの時、馬を捕込に追う役の村人のことです。こちらの土手は幕府の必要で作られたので、御普請土手と呼び築堤に駆り出された村民には1日5台の扶持が与えられました。

◆北部地域の野馬土手

当時の江戸川台は牧の中で、野馬土手は西側に美原から上新宿にかけて、北側は東深井と江戸川台の境界に、東側は江戸川台から初石にかけて江戸川台を囲むように作られていました。現在市内の野馬土手はほとんど消滅してしまいました



「松ヶ丘の野馬土手」
平成26年3月25日流山市教育委員会

て、北側は東深井と江戸川台の境界に、東側は江戸川台から初石にかけて江戸川台を囲むように作られていました。現在市内の野馬土手はほとんど消滅してしまいました。野馬土手がいつで来たかは確かな資料がありません。村々の事情により一定ではなかったと思います。寛保元年(1741)の西深井村の郷差出帳には、野馬除木戸番を職とする者がいることから、この時点では土手はなかったこととなります。牧(江戸川台)の西は平方原新田(美原)、北が東深井ですから、野馬は西深井までこれらの地を超えて行っていたのでしょう。野馬土手のない時代の農民の苦労がわかる気がします。一方、1800~1807年にかけて作成された五街道他分間延絵図には描かれているので、1700年代の後半に築かれたものと思います。

わがまち・ふるさと再発見!
流山のむかしを訪ねて

30 江戸時代5
小金牧4



案内役 田村哲三

野馬の捕獲

野馬の捕獲を野馬捕りと呼びます。初めは3年に1回行われていましたが、調教しやすい3歳馬を捕獲するため、享保7年以降は年1回に改められました。

捕獲は牧を管理する牧士が、近隣の村から動員された村人を指揮して行いました。動

員された村人は勢子と呼ばれ、大声を上げて竹棒などを打ち鳴らし、勢子土手から捕込(トッコ)と呼ばれる捕獲場に追い込みました。追い込まれた馬は、捕手(トツタリ)と呼ばれる捕獲者が前足に飛びついて捕獲します。野馬捕りは勢子を動員しやすい農閑期に行いました。捕手の語源はいくつかあり、前足(手)を捕まえることからトツタリ(捕足)となったという説が有力です。



野馬捕り絵図「総牧奇観」(成田図書館蔵)

捕獲した馬は選別され將軍へ献上する馬を選び、1歳未満の馬は牧ごとの焼き印を押して牧に放しました。また、一部の馬は民間に払い下げられました。慶長19年(1614)の「小金之領野馬売付帳」の記録では、16頭が払い下げられ、代金70貫弱と

あるので1頭の値段は約1両になります。1両が現在の価値でどのくらいになるかは定かではありませんが、10万円~30万円という説もあります。

御林

牧には御林という幕府の管理下にある林がありました。牧は原野ですが夏の太陽光や冬の風雨を避ける地がありません。そこで作られたのが御林で野馬の休息する場でもありました。また野馬の侵入を防ぐために村との境界に作られた林も御林と呼ばれました。これらの林は幕府の管理下にあり、落ち葉や草、木の実、キノコなども取ることはできませんでした。しかし、御林の落ち葉や枝は村人にとって貴重な燃料ですから幕府に願ひ出ます。幕府は野銭という税金を払った村だけにその権利を与えました。一方、野銭を払っている村でも木の伐採はできません

した。江戸川台の地は御林でした。明治13年の迅速図を見ると、松や桐が植栽されているのがわかります。現在も江戸川台には松が各地にみられますが、御林の名残といえます。

木戸

牧には水戸街道や日光東往還、諏訪道の他にも村から牧へ入る木戸があり番人がいました。専門の木戸番を置いた村もありましたが多くは村々が持ち回りで担当しました。

わがまち・ふるさと再発見!
〓 流山のむかしを訪ねて〓
③1 江戸時代6
小金牧5

案内役 田村哲三



野馬の品種改良

幕府は野馬の品種改良にも力を入れました。おもに奥州の三春駒や南部駒を小金牧などに放ち、さらに外国産の馬も導入しました。延宝期や享保期にはベルシャ馬が導入されましたが、オランダ国からの輸入だったのでオランダ馬と呼ばれました。

慶応3年(1867)にはフランスのナポレオン3世からアラビア馬が贈られています。

オランダ馬には悲しい話が残されています。

オランダ観音

おおたかの森北2丁目の住宅街にオランダ観音の祠があり、中には2つの馬頭観音塔があります。

1つは延宝4年に十太夫新田の須賀八右衛門が願主で建立したもので、碑文には「おんはなしあそはされをらんたあしげ駒この所ひやうし」とあり、葦毛のオランダ馬がこの場所で病死したと解釈されています。一方、八木村誌と東葛飾郡誌にはオランダ馬悲話として地元伝説を伝えています。悲話は「小金原の牧があった時代、オランダより購入した栗毛の駿馬を種馬として放牧したが、馬体軽快で人を傷つけること甚だしく野馬方の市野谷村鈴木庄左衛門が銃殺したが、日ごろ住み慣れたこの沢に逃げてきて水を飲んで死んだ。のち住民が祠を建てた」と

いうもの。

病死説派は、幕府の貴重な馬を銃殺するわけがないといい、銃殺派は、塔は後年建てられたもので、病死としたのは噂から幕府のお咎めを受けるのを避けるためだという。病死か銃殺か興味のあ

る話ですが、異国の地になじめず亡くなった馬を供養した、村人の想いには変わりはありません。

オランダさま

美原3丁目の流山街道沿いにオランダさまと呼ばれる祠があります。

祠の横の碑には「8代將軍吉宗は馬匹改良のためオランダ東インド会社に命じてベルシャ馬を輸入し放牧した。そのうちこの地で死んだ馬を祀ったのがこの馬頭観音である。元文2年の建立でオランダさまとして信仰された」とあり、また、次のような話もあります。「大正時代、地主が祠のある地を手放し、祠を敷地内に移したところ災いが続いた。占いでオランダさまが元の地に戻りたがっているとおたので、元に戻したら災いはなくなつた」というものです。200年後であっても、亡くなった地に帰りたいかたというのでしょうか。



オランダさまの祠